聾者方広経典を帰敬ひて報を得両の耳聞ゆる縁　第八

小墾田宮に宇御めたまひし天皇の代に、衣縫伴造義通といふ者有り。急に重き病を得て、両の耳並に聾ひ、悪しき瘡身に遍し。年を歴て愈えず。自づから謂はく「宿業の招ぶ所なり。ただし現報のみにあらず。長く生きて人に厭はるるよりは善を行ひて遄に死なむに如かず」とおもひて、すなはち地を掃き堂を飾り、義禅師を屈請へ、まづ其の身を潔めて香水に澡浴みて、方広経に依る。是に希有なる想を発し、禅師に白して言さく「今我が片耳に一の菩薩の名を聞く。故にただし願はくは大徳、忍労りてまた促せ」とまうす。禅師重ねて拝めば片耳既に開く。義通歓喜びて、また重ねて礼まむことを請ふ。禅師更に拝めば両の耳倶開く。遐く邇く聞く者、驚き怪びずといふことなし。是に知る、感応の道諒に虚しからず、と。

江の戦。一五 仏をさして「神祇」といっている。戦難を免れる、あるいは下文にみえるように、浅い処を得て海を渡る、といった説話は、観音菩薩の信仰にかかわって示されることが多い。一六 上巻五縁に災を起す隣国の客神とされていた仏が、本説話では災難を免れしむる神祇とされる。一七 三次市の寺町廃寺跡がその跡地とされる。造寺のイメージは中巻九縁の「擅二於己所レ造寺一」に結びついている。一八 以上が、禅師弘済が伽藍と諸寺とを造立した事情である。一九 鋳造された金銅仏の鍍金には金アマルガムが用いられる。金と丹とは金アマルガムの原料であろう。二〇 底本訓釈「晩〈久礼〉」。二一 所在不明。宇治拾遺物語・下・一八九に「かばね嶋といふ所は、海賊の集まる所なり」とみえる。二二 毛宝の説話に類似する（契沖の指摘がある）。晋書・八十一に「初宝在二武昌一、軍人有二於市一買二得一白亀長四五寸一、養レ之漸大、放二諸江中一、邾城之敗、養レ亀人、被レ鎧持レ刀、自投二於水中一、如レ覚堕二石上一、視レ之、乃先所レ養白亀、長五六尺、送至二東岸一、遂得レ免焉」とあり、幽明録にもみえる。亀に足を支えられて海を渡るイメージは、下巻九縁の主人公が冥界の使に先導されて冥界の河を渡るイメージに結びついている。二三 岡山県浅口郡金光町占見あたりか。原文「其備中浦」とある「其」は「於」の意か。二四 幽明録「廻顧而去」。「その亀、三つ領（ゐ）て去りぬ」として、その亀は禅師を背から下ろして三匹の亀をひきつれて波間に去った、と解し、四匹の亀を助けたので四匹が禅師を救済に来た、とする小泉道の説がある。その説に従うならば、たんに「三領」とだけある本文にじつに多くの内容を読みとる必要が生じる。二五 原文「其寺売金丹」。「其」は「於」の意か。二六 施主。三谷郡の大領の